

## 『保護犬・保護猫を家族に迎え入れた私たち』

例会の後半は、松原賢氏進行のもと、実際に保護犬や保護猫を家族に迎えた経験のある3名の方それぞれがご自身の経験談をお話されました。

ご登壇されたお三方の簡単なプロフィールは以下の通りです。

■田尻光久さん：カメラマン。宮崎県出身。小さな頃に犬に咬まれたくらいしか犬についての思い出がなかった。現在はペットショップから迎えた犬、そして保護犬・保護猫とともに暮らしている。



■山川みづきさん：D&Department TOKYO 勤務。地元の幼馴染と一緒に「さとねこたより」などのフリーペーパーを出している。現在は保護猫と暮らしている。



■山本和子さん：広島県出身。元リクルート社員でゼクシィなどの雑誌を手がけていた。現在はフリーランス。ペットショップから迎えた犬と保護犬と一緒に暮らしている。



### 保護犬・保護猫と出会うまで

松原さん：まずは皆さんに、保護犬や保護猫を引き取る前の状況をお聞きしたいと思います。田尻さんが最初に迎えたワンちゃんは、ペットショップからだったと伺っておりますが。

田尻さん：はい。2003 年にラブラドール・レトリーバを迎えたのが最初で、その半年後にゴールデン・レトリーバーを迎えました。その当時は保護犬や保護猫のことはまったく知らず、可愛いからという理由だけで飼うことを決めました。

松原さん：山川さんは保護猫を迎えるまで一度もペットを飼った経験がなかったのでしたよね。

山川さん：そうなんです。動物が苦手というわけではなったのですが、自分が飼うことをまったく想像できずにいました。ただ、祖母の家では飼い主のいない犬や猫を見つけては飼っていましたので、いろいろな犬や猫と触れ合う経験はありました。

松原さん：山本さんも最初はペットショップから愛犬を迎えたのですよね。

山本さん：幼少の時に一度だけ犬を飼ったことがありましたが、そのときは近所の人が拾ってきた犬をそのまま譲り受けました。そのような経験をしたにもかかわらず、犬や猫を飼うときはペットショップから買うのが普通だとずっと思っていました。会社を辞めてフリーランスになったときに「犬を飼おう」と思い、「ではペットショップに買いに行こう」となったのです。

### 保護犬・保護猫の存在を知るきっかけは？

松原さん：皆さんはそれぞれ、「保護犬や保護猫の存在」があるのを知った瞬間を経験されています。田尻さんは 2008 年にその存在を知ったということですが、それはどのような経緯だったのでしょうか？

田尻さん：自分の犬たちが可愛くて写真を撮っているうちにかなりはまってしまいました。そのような状況だったので、仕事上つき合いのある方から犬の写真を撮る仕事をいただくようになり、その方面から保護犬や保護猫の情報が入ってくるようになりました。また、犬を飼っていると犬友たちがどんどんできてきますよね。犬友たちから保護犬や保護猫の話を聞いたり、実際に保護活動をしている方もいたりして、犬友たちからの情報でも知るようになっていきました。ただ、当時は保護活動をしている人には過激な人が多いなあという印象を持っていました。直接お話しをする分には普通なのですが…。そんなこともあり、保護犬や保護猫たちの存在を知ることになったものの、あまり首を突っ込むのもいかがなものかなと思いました。当時は傍観していました。

松原さん：山本さんが知ったきっかけを教えてください。

山本さん：2015 年 5 月に 1 頭目のパグをペットショップから迎えたのですが、その後、梅雨に入り、暑くなってきたため散歩に行くのが難しくなってきました。鼻ペチャ犬種なので暑さにかなり弱いということもあります。とはいえ当時はまだ遊び盛りだったのでどうにかして発散させねばと思い、室内ドッグランを検索して連れて行きました。たまたまその室内ドッグランが、犬のしつけやデイケア、ペットホテルなどもしているところで、そこにいた看板犬が保護犬出身だったので。最初、「この子は保護犬です」と言われたときには「ホゴケン…？ふ～ん…」となりました。その頃は保護犬どころか犬についてまったく知識がありませんでしたので、保護犬と言われても、言葉そのものがすぐには入ってこないという状態でした。

松原さん：山川さんは熊本県の「のはら農研塾」で知ったということですが、農園で知るとはいったいどういうことだったのでしょうか？

山川さん：前職のとき、農家に2日間泊まり込んで農業の取材をするという仕事をしたのですが、その取材先が熊本でオーガニックの農業をやっているのはら農研塾というところでした。目的は農業を知ることだったのですが、そこは犬や猫がたくさん元気に畠や敷地を駆け回っているような場所だったのです。とにかくとても楽しそうで幸せそうにしていたのをはっきりと覚えています。農家の方から、そこにいる犬や猫たちは拾ってきたり飼いきれなくなった子を引き受けたりしたというお話を聞いて、初めて保護犬や保護猫の存在を知りました。

## 保護犬・保護猫を迎えると決めたきっかけは？



松原さん：保護犬や保護猫の存在を知ったあと、皆さんは彼らを受け入れる決心をすることになりました。そのときの状況をお聞かせください。

田尻さん：フェイスブック（FB）での犬友たちの付き合いが広がってきていたころで、仕事上、日本中あちこちに行くことも多く、各地方に行くついでにFBの友だちに直接会うようになっていました。あるとき山口に住んでいるFBの友だちに会いに行くことがあったのですが、その方は近所のお友だちと一緒に保護活動をされていて、ご自宅に遊びにいったら保護している猫がいました。私が行くより前にその方のお宅にお邪魔していた私の奥さんはすでにその猫と仲良くなっていて、案の定、連れて帰ることになったんです。ただ、その猫は事故に遭っていて足が悪く、家に連れてきて2、3カ月で急に体調を崩して亡くなってしまいました。気を落としていると、また別のFBの友だちで長野に住んでいる方が「うちにも猫がいるよ」と言ってきたのです。猫の写真を見て「かわいいですね」とコメントを返したら、「もらってね」と返事が返ってきました。気づけば車に乗って飯田まで取りに行っていました。もともとその猫は犬のいる家庭で保護されていたので、まったく犬を気にしないどころか自分を犬だと思っているくらいの子でしたので、幸いうちの先住犬2頭たちともすぐに仲良くしてくれました。来たときは3カ月齢くらいで、今ちょうどまる1年くらい経ちます。

まずはこのような経緯で保護猫が我が家にやってきて、その後、2頭飼っていたうちのレトリーバーの片方が昨年6月に亡くなりました。悲しみに沈んでいたときに、FBでシェアされていた情報をたまたま目にすることがありました。直接の知り合いではなかったのですが「こんな子が沖縄にいます」という写真一枚を見て、「この子を迎えるのですがどうしたらいいでしょうか」とすぐに連絡をしていました。その子は保健所に入っていたのですが、とりあえず保健所から引き出して、お金を払って動物病院で預かってもらっているという状況でした。預けるための経費がかかっていましたので、ならばひとまず早くうちに連れてきてあげようと思ったの

です。もしもうちの先住犬と相性が悪ければ私の方で預かりながら譲渡先を探しますから、ということでトントン拍子に話が進み、写真を目にした3、4日後には空輸されてきたその犬を羽田空港まで迎えに行きました。

松原さん：山川さんもフェイスブックがきっかけだったのですよね。

山川さん：のはら農研塾の取材から戻り、そこにいた犬猫が可愛かった～！という話を母にしましたところ、やっぱりペット飼いたいよね！という話になりました。母も実家でたくさんの犬や猫を飼っていましたから。うちには5人家族で、それまではペット飼うどころの感じではなかったのですが、ちょうど子育てもひと段落したところだったというのもいいタイミングでした。母親のほうがむしろ「保護猫ちゃん？よさそうね」と、フェイスブックなどで保護猫情報をチェックするようになりました。そこで母の友だち経由でリツイートされていた保護猫のポストを見た後、一度見に行ってみようという話になったのです。見に行く前から、母は「猫の飼い方」のような本を買っていて、迎える気満々になっていました。

松原さん：お二人ともフェイスブックを通じて個人の方から迎えたということでしたが、山本さんは譲渡会に行かれたようですね。

山本さん：先住犬が室内ドッグランの看板犬をしている子たちとともに楽しそうに遊んでいるのを見て、保護犬を迎えるのがいいというよりは、もう一頭迎えれば一緒に遊べて楽しいのではないかと思い始めました。多頭飼いをしたかったということなのですが、私はもう1頭もパグを迎えるかと思っていました。多頭飼いをしたいと考えるようになった最初のころは、1頭目を買ったペットショップでもう1頭も買おうかと考えましたが、ふとドッグランの保護犬を思い浮かべました。そのときは、保護犬といえば病気を持っていたりシニアだったり、問題行動があったりする子ばかりではないかと思っていたのですが、もしかしたら保護犬の中にも普通の子がいるかもしれないちょっと期待を抱いたのです。

とはいってもwebサイトで探して直接問い合わせをする勇気がなかったので、とりあえずは譲渡会へさりげなく見に行ってみることにしました。なんと、たまたまそこにパグがいたのですが、その日は見るだけで帰ってきました。そこから本気でインターネットで探してみたところ、思っていたよりも純血種の保護犬がいることがわかり、それならなにもペットショップに行かなくても今飼い主がいない子たちとうまくマッチングできればいいのではないかと考えるようになりました。

そこで、勇気を振り絞って新たに探した子との面会をお願いしてみました。ただし、まだ私の知識も少なく、面会に行って私が「この子でOKです！」と言えば迎えることができると思っているような状態でした。面接にはクレートを積んで張り切って行ったのですが、申し込みをしたその子は人気で、私のほかにも3人ほど面会する予定になっていました。正直その時、「え？私の方が審査されるの？」と思ってしまいました。今から思えば、「私が引き取ってあげる」というような上から目線のところがあったのかもしれませんね。

最初に会いに行った子については残念な結果となりました。理由は、今飼っている犬が1歳、その保護犬が7歳で体力差があり、遊ぶとしても年上犬に負担がかかること、そしてその子は気管に病気があって興奮すると体に負担がかかるため、若い子と一緒に暮らすのは厳しいだろうこと、そして年齢差があることはのちのち散歩などにおいて飼い主に負担がかかることなど、丁寧に説明してくれました。そしてもし引き続き保護犬を探す場合には、もう少し若い子を探した方がいいですよというアドバイスももらいました。ダメだった理由が私の態度ではなくてホッとしました。最初の面会のときに団体の方からいただいたアドバイス通り、若い子が出てくるまで待つことに決めたのです。

松原さん：団体さんからのアドバイスが保護犬選びに役立ったということですね。

山本さん：そうですね。犬種によっても違うでしょうし、その子の性格などによって必ずしも1歳と7歳がダメということではないと思いますが、そのあたりを全体的に見て、実際に生活をしていくことになったときにうまく行くようなマッチングを的確にされているのだなあと感じました。最初はダメだったのですが待つ決意をしましたところ、たまたまその1か月後に2歳のパグが出てきたのを友だちが見つけてくれたのです。その子のプロフィールを見ましたところ、先住犬とも性格が合いそうだと思ったのですぐに応募しました。なんと、それがうまく行きまして、その子をうちに迎えることができました。

松原さん：その犬がふがふがれすきゅークラブさん出身ということで、先ほど譲渡条件などを紹介させていただきました。

### 保護犬・保護猫を家族に迎え、こんなはずじゃなかった…と思ったことは？

松原さん：このようにして皆さんのお家に保護犬・保護猫がやってきましたが、いざ生活をしてみると「こんなはずじゃなかった…」というようなことがあると思います。そのあたりについてはいかがでしょうか。

田尻さん：なんといっても犬がレトリーバーだったので、ある程度言えば基本的に理解してもらえる子というのが私の根底にできてしまっていました。猫もなんとなくですが知っているつもりでしたし、それこそ猫も杓子もレトリーバーのように理解できるとは思っていなかったのですが…。家に来た夜から猫が走り回って眠れない状況になってしまいました。数か月で亡くなってしまった前の猫は足が悪かったこともあってか、人間と同じペースで夜はおとなしく寝てくれて、騒ぐのは朝からだったのです。とにかく今の子が来た当初はあまりに夜がうるさいのにビックリしました。「何とかならないものなのでしょうか？」と猫を飼っている方に相談しても、「そんなもんだよ、あはは～」と軽く受け流されました。トレーニング云々ではなく、人がそれに慣れなさい、ということなんですね。犬と猫は違うんだなあと思い知りました。それでも1年ほど暮らしてきて、だいぶ夜は静かにしてくれるようになってきています。

松原さん：野犬出身のワンちゃんの方はどうでしょうか？

田尻さん：保護犬といえば、純血種というよりいろいろな場所にいる野犬が保護されているというイメージの方が強く、野犬は咬む？狂暴なの？などと思っていました。しかし全然そんなことはなく、むしろ逆に人間がいるとコソコソと影に隠れていて、夜になって人が寝静まるとようやく出てきてその辺のものをあさって食べるという感じに最初は驚きました。人に触られると怖がってブルブルと震え、怖さ故に威嚇してくることもあります。家に来てすぐ、お風呂に入れようとしてやつとのことで抱えたら、恐怖のあまり下のものをすべて出してしまうほどで。1か月くらいは接触するたびに怖がっておもらしをしちゃうことが続きましたし、基本的に人が見ているときには動かない、人が見ているとご飯を食べない、という状況でした。3か月くらい経つと少しづづ慣れてきて、見ても食べるようになったのですが、ちょっとでも近づくと食べるのをやめて逃げていってしました。もちろん犬にもよるそうですが、うちに来た子はほんとうに時間をかけて少しづつ少しづつ慣れていく感じでしたね。

松原さん：山川さんは猫がきてから朝がものすごく早くなったということですが。

山川さん：うちに来た子は生後1か月くらいのときに図書館の地下の駐車場に捨てられていて、植木鉢の中に入れられ外に出られない状態になっていたそうです。見つけた人が家に連れ帰ってご飯をあげたら、空腹のあまり

か、声を出しながら食べていたと聞いています。そういう経験があったためか食べ物への執着がものすごく、朝4時くらいからニャーニャー始まって家族全員目覚めてしまい、ご飯をあげて落ち着いたところで家族は二度寝するという状態になりました。そこで、家族5人で協力し合って明け方のご飯対応をするようになりました。それまで家族で各自のスケジュールを細かく共有することなどなかったのですが、猫が来てから家族関係も変わって会話も増えたと感じています。

松原さん：山本家ではメス同士の争いが起きたようですが、どのような感じだったのでしょうか。

山本さん：2頭目が来た当初は朝から大運動会状態になることが多く、それが1か月くらい続きました。お互いにちょっと気が強いメス同士、運動会を通じて勝負をしていたようで、勝敗が決まったところでパタリと運動会は終わりを迎えました。勝ったのは先住犬です。年下なのですが。新しく来た方の犬は体力で負けてしまうことを自覚したためか、今度は口で対抗するようになりました。もともと要求吠えがあると言われてはいたのですが、それをかなり出すようになってきました。先住犬は自己主張するために吠えることがほとんどなかったので、要求吠えのすごさにはかなりビックリしました。力関係での勝敗が決まってから状況は変わっていないのですが、2頭がケンカをすることはなくなりましたね。

### 保護犬・保護猫をおススメします！

松原さん：保護犬・保護猫の飼い主さんの先輩として、こんなところがいいよというようなことがありましたら是非お聞かせください。

田尻さん：野犬だからなのかもしれません、コソコソとしていてとても静かです。なので、マンション住まいの方や、ご近所に対して無駄吠えが気になるというような方には向いているかもしれませんと思います。犬の方は迎えてからようやく半年ちょっと経ったくらいですが、やっと普通に散歩に行けるようになりました。面白いことに、犬の散歩の準備をしていると真っ先に玄関に行って待っているのが猫なんです。外に出るのがすごく好きな猫なので、今はほとんど歩けなくなった16歳の黒ラブと一緒にカートに乗って散歩に出かけています。来た当初はできなかつたことが少しずつできるようになっていき、家族になっていく様子が見られるのがすごく楽しいです。

山川さん：お金をして買うというのがスタートではないのがいいと思っています。人と出会うのと同じで、偶然出会い、対等な関係にある上で一緒に暮らせるのがいいなと思います。

山本さん：動物に対する知識があまりない方にとっては、保護団体から最初の犬を迎える方がむしろいいかもしれませんと感じます。最初の犬をペットショップから迎えたときは、たとえばちょっと様子がおかしいときには病院に行くしかありませんでしたが、団体から迎えた場合には預かりをしていた方へ連絡を入れて相談をすることができました。預かりさんとは犬の状況を共有しやすいため、細やかにサポートしていただくことができてとても助かりました。私は犬についての知識があまりない状態で飼おうとしていましたから、団体の方にマッチングをしてもらえることや、いろいろなアドバイスをもらえるというのはすごくありがたいことだったと思っています。